

読み換えられる不安

——ジグムント・バウマンの「不安の社会学」をめぐって

澤 井 敦

はじめに

I 実存的不安の歴史的・社会的変容

1 死への不安

2 不安の個人化／他者への不安

II リキッド・モダンの不安の社会的様相

1 リスク化される不安

2 消費される不安

3 不安格差

III 読み換えられる不安

1 「安定性への不安」から「安全性への不安」へ

2 読み換えの無限循環

おわりに

はじめに

二〇〇〇年に刊行された『リキッド・モダニティ』(Bauman 2000=2001)以降、ジグムント・バウマンは、リキッド・モダニティとしての現代社会の様相を、家族や性愛や死、労働や消費やコミュニティ、格差や貧困やグローバルゼーションといった様々な次元を自在に行き来しつつ論じてきた。一九九〇年代半ば以降、世界的に急速に進行したグローバルゼーションや情報ネットワーク化、またそれにもなう社会の流動性の急速な上昇や社会的な格差や排除への傾向の顕著な拡大といった世界情勢の変化をふまえて、二一世紀の社会・世界の特質を包括的に理解しようとする企てが、バウマンのリキッド・モダニティ論である。バウマンの著作もすでに複数の邦訳がなされているし、リキッド・モダニティという概念自体も、日本の社会学の教科書や事典などで、現代社会論のひとつのスタンダードとして、たびたび言及されるようになっていいる。

『リキッド・モダニティ』以降、タイトルに「リキッド(流動化・液化化する)」という語がもちいられていてもいなくても、バウマンの著作はすべて、このリキッド・モダニティの様相を多様な観点から読み解く試みであると言える。ただ、あえてタイトルに「リキッド」という語が使われている書物(共著やインタビュー形式の著作を除く)を現時点でリストアップすれば、刊行年順に、『リキッド・ラブ』(Bauman 2003)、『リキッド・ライフ』(Bauman 2005b=2008)、『リキッドな不安』(Bauman 2006 = 2012)、『リキッド・タイムズ』(Bauman 2007)、『リキッド・モダンの世界からの四四の手紙』(Bauman 2010b)、『リキッド・モダンの世界の文化』(Bauman 2011b)となる。この中で、『リキッド・ラブ』と『リキッドな不安』以外の著作が、実質的にはリキッド・モダンの世界のさまざまな様相を論じた小論の集成であるのに対して、『リキッド・ラブ』と『リキッドな不安』は、それぞれ「愛」と「不安(あるいは恐れ)」という、二つの、しかも対照的かつ根源的な感情・心理に焦点をあててい

ることが特徴的である。ただ、『リキッド・ラブ』は、その副題が「人間の絆の脆さについて」であることからわかるように、恋愛や家族愛、友愛について論じると同時に、むしろ、そうした親密な関係性の変容を考察することを通じて不安定化する人間の絆やつながりのあり方を再考した書であると言える。そして、流動化する絆やつながりの中で、時として愛をもうわまわる強度をもって人びとの心を覆い、捉えつつあるもの、それが、本稿の中心的論点となる「リキッドな不安」あるいは「液状不安」である。⁽¹⁾

不安という語は、日本でも近年、現代社会の状況を大まかに特徴づける際にしばしばもちいられるものとなっている。ただ、不安についてあつかった書物ということで考えると、その大半は、メンタルヘルスに関する一般書や専門書である。このように、一方で、社会情勢を一般的に特徴づけるキーワードとして、やや漠然としたかたちで不安という語がもちいられると同時に、他方では、個人の心理に関する治療や自己啓発という文脈で、不安が論じられるという状況がある。そして、それぞれの議論において不安が言及・議論されているとはいえ、その両者を本格的に結びつけようとする試みを、（特に不安に限定されたものではない一般的な議論としては、社会学での「心理学化」をめぐる議論などがあるものの）目にすることはあまりない。そうした中で、パウマンの議論は、死をめぐる不安や他者をめぐる不安という実存的な次元から、近代化全般にまつわる不安、グローバルゼーションや個人化をめぐる不安といった社会的な次元まで、不安のあり方を多元的に論じつつ、なおかつ、それらを相互に関係づけていくことで、現代社会における不安の特質を照射する開かれた展望を提示していると言えるだろう。

ただ、とはいえ、パウマンの議論は、体系的に整理された理論を提示するようなものではけっしてない。パウマンの場合、著作の一冊一冊の完結度が低いというわけではないが、同時に、各著作のいわば相互補完性の度合いもまた大きいと言える。ある著作では、ほんの一段落、場合によってはほんの一文で述べられていることが、

他の著作では、一章、場合によってはまるまる一冊全体で論じられていたりする。同じ主旨の議論が、論じ方や素材、文脈上の位置づけを変化させながら、複数の書物で登場してくるということもある。バウマンの著作群は、全体として、このような相互参照が織り成す複雑な集合体をかたちづくっていると言いうことができるだろう。

たとえば言えばそれは、各著作がリンクを縦横に張りめぐらしながら、相互に編み合わされて形成された、巨大なウェブサイトのようなものである。二〇〇〇年代以降、八〇歳をすぎても多作なバウマンであるが、新しく刊行される著作は、このウェブサイトに時代に即したより新しい情報を付け加えると同時に、サイト全体をもアップデートしていくものとしてイメージすることができ。こうしたスタイルをバウマンがとるのは、まさしく現代社会の「いま」を切り取る見取り図を、そのつど更新された姿で描くことを目的としているからである。言い換えれば、目指されているのは、普遍的な妥当性を有するような、体系的な理論を構築することではない。近年の著作のどれでもかまわないが、一読すればわかるように、バウマン本人にそうした志向がまったくないことは明白であろう。簡潔で整理された概念の説明や、理路整然とした理論的考察を期待してバウマンの著作を手にとるなら、場合によっては困惑してしまうかもしれない。

ただ、とは言っても、バウマンの議論が難解なものか、と言うと、そういうわけでもない。ウェブサイトの喩えを引き続きもちいて言えば、サイトを構成する各ページを読み進めながら、各々のページに張りめぐらされた多岐にわたるリンクを、行きつ戻りつしつつ、少しずつたどっていくことをつうじて、徐々に、サイトの全体像やそこに浸透している思考の枠組みが明らかになってくる。いわばそれは、バウマンの「マインドセット」を把握する、ということである。このマインドセットをある程度把握することで、細かな事例からマクロな世界的動向まで、多次元に散らばる個々の議論がどのように編み合わさっているのか、また、個々の議論が全体の中でどのような位置を占めているのか、ということが、だんだんと見えてくるようになる。そうなれば、バウマンの書

を読み進めることは、いわば読者自身の中で、読者自身の視点から、かのウェブサイトを自分なりに再構築していくこと、つまり、バウマンの議論をツールとしながら、自分仕様の現代社会の見取り図を編み上げていくプロセスとなる。

本稿で試みたいのも、このような意味で、バウマンの議論をふまえつつ、彼が示唆する「不安の社会学」を再構成することである。「液状不安」という概念の「液状」とは、単に不定形であり、堅固で明確なかたちをとらないということの意味するのではない。バウマンが、この「液状不安」という概念で表現しようとしているのは、それが不定形であるということよりも、むしろ、次々と「読み換えられていく」という意味で、流動的なものだということである。そしてその「読み換えられる」仕方、その様相や構造は、歴史とともに変化し、社会状況におうじて姿を変えていく。バウマンの議論が「不安の社会学」と呼びうるものであるのも、まさにこのことによる。

すでに述べたように、バウマン自身は、「不安の社会学」というタイトルで、整理された理論的構図を描いているわけではない。むしろ以下では、筆者の視点から敷衍しながら、バウマンの議論を「不安の社会学」として再構成することを試みる。それはまた、われわれが生きる現在の日本社会の状況を社会理論的に考察するためのひとつの構図を描く、という作業とも接続していく試みである。

I 実存的不安の歴史的・社会的変容

1 死への不安

哲学者、マルティン・ハイデッガーは、かつて、それが向かう対象を有する「恐れ」と対比させて、それが向

かう対象をもたない「気分」として「不安」を特徴づけた (Heidegger 1927=1964)。そして、その不安の根底にあるのは、われわれがいずれ実存することができなくなってしまう可能性、つまり無に直面する可能性を先取りするからであるとされる。言い換えれば、われわれが抱く不安の根底にあるのは、死への不安である。

何か脅威となる対象へと向けられる「恐れ」や「恐怖」とは異なり、特にそうした対象が存在するわけではないのだけれども、何かしら漠然とした、不安定な情感としてわれわれを覆うもの、それが「不安」である。こうした区別は、何もハイデッガーに限らず、不安を語る場合、たびたびなされている。そして、このような不安を呼び起こす根底にあるのが、われわれがいつか死ななければならない、また、その運命を変えるためにできることは何もないという事実である。

バウマンの不安論の出発点もまた、この死への不安である。バウマンによれば、「『不安』とは、われわれのもつ不確実性 (*uncertainty*) に、われわれが与えた名前である。不安とは、脅威についてのわれわれの無知、つまり、それをその場に止めるために……何かなされるべきか……ということについてのわれわれの無知に、われわれが与えた名前である」(Bauman 2006: 2=2012: 8)。われわれは、自身の力で理解したり、管理したりできないものの、「未知のもの」に対して不安を抱く。そして、死こそ、もつとも徹底した、究極的に「未知」のものである。「死は、『未知なるもの』の化身である。そして他のすべての未知なるものの中でも、死は唯一の、完全かつ真に不可知のものである。われわれが死に対してどんな準備をしたとしても、死は不意に、準備不足のままわれわれを訪れる。さらに追い打ちをかけるように、死は『準備』という観念そのもの——生きる知恵をかたちづくる知識やスキルの蓄積——を、無価値で空虚なものとする。絶望や不幸、無知や無力は、しかるべき努力をつうじて、他のすべてのケースでは治癒され得る。しかし死の場合はそうはいかない」(Bauman 2006: 30=2012: 50)。

こうした文脈で、バウマンはたびたび、ミハイル・バフチンの「宇宙的不安 (cosmic fear)」の概念に言及す

る (Bakhtin 1968=2007; Bauman 2004b: 46-53=2007: 79-93)。人知をはるかに超えた広大な宇宙や世界、自然に思いを寄せる時、われわれは、自らの存在の卑小さ、取るに足らない小ささを思い知らされる。空間的観点からみて、私がいまどのようにこの宇宙に存在しているのか、そもそも宇宙とは何なのか、人には理解することはできないし、また、その宇宙の存在そのものを変えたりすることはできず、それに身を任せるしかない。こうした点からみれば、いくら社会的な地位や財産を得ようが、われわれの存在は、根本的なところで不確実性を帯びている。時間的な観点からみても、生まれてから死ぬまでのごくごく短い時間を超えてひろがるはるかに長大な時間の流れに思いを寄せる時、われわれは、同様の感覚にとらわれるだろう。このように、われわれの存在が、われわれの力では如何ともしがたく、また根本的に理解できないものによって左右あるいは翻弄されており、そこには確実なものなど実は何ひとつない、ということ、こうした事実直面することがわれわれに抱かせるのがまさしく不安である。そして、一人ひとりの個々人というレベルでみるなら、以上のような事実が否応なく、文字どおり身に迫る事態こそ、まさしく死である。

以上のような議論は、ともすると浮世離れ、「現実」離れた議論として片付けられかねない。しかしむしろ考えるべきなのは、以上のような事実が、きわめてシンプルな、子どもでも感得しうる真実であるにもかかわらず、「大人」の社会において無用のものとして「片付けられてしまう」傾向にあるということ自体がもつ意味である。言い換えれば、以上のような事実、つまり、われわれの存在が根本的に不確実なものであり、死により無に帰するものであるかもしれない、という現実におそらく常に向き合いながら生きていくことが、われわれにとって、きわめて困難をとまなうということである。⁽²⁾むしろ、一定度の精神的な安定をわれわれがうるためには、こうした現実が呼び起こす不安をある程度緩和することのできる仕組み、社会的な仕組みが必要とされる。逆に、こうした観点からすれば、極端に言えば、アーネスト・ベッカーがかつて述べたように、人間がこの社会でなす

すべての営みの原動力は自らの死を否定するということであり、ナショナリズム、性愛、宗教、出世、創作活動などはすべて、象徴的なたちで不死性、あるいはそれに近いものを獲得し、死やそれが呼び起こす不安を意識下に押し込めようとする営み、ということになるかもしれない (Becker 1973=1989; Bauman 2001b: 1-3=2008: 9-12)。

バウマンの不安論もまた、基本的には、ベッカーと同様の、取り方によっては非常にシニカルなこうした認識を出発点としている。バウマンは次のように述べる。「あらゆる人間の文化は、死すべき運命 (*mortality*) という認識をともなう生を、生きていくことができるものにするために作られた、巧妙な仕掛けとして読み解くことができる」 (Bauman 2006: 31=2012: 51)。つまり、死への不安をそのまま受けとめさせるのではなく、いわば別の水路に流し込み、生活の中のような活動のための活力源へと変換する「仕掛け」こそが文化だ、という認識である。ただ、ここでいう「仕掛け」がどのようなものとなるか、その形態は歴史的・社会的に変化する。前節で述べたように、この「仕掛け」の変遷をたどり、それぞれの「仕掛け」の社会的特質、とりわけ近代以降のそれを明らかにするという点にこそ、バウマンの不安論を「不安の社会学」と称しうる根拠がある。以下ではまず、近代へ至るまでのこの「仕掛け」の変遷を、バウマンの議論に沿ってごく簡単にまとめておきたい (Bauman 2006: 31-8=2012: 51-61; Bauman 2001b: 238-50=2008: 323-9)。

まず、こうした仕掛けの中でもっとも一般的なものとして、多種多様な宗教があげられるだろう。宗教は、ごく一般的に言って、死後にもわれわれの存在がなんらかのたちで存続していくことを保証することによって、不安を緩和しようとする。それだけでなく、少なからぬ宗教は、この世での生をどのように生きるかにおいて死後の運命が変わってくると説くことをつうじて、むしろ死に、この世の生に意味をあたえるという積極的な役目を担わせようとする。基本的に、近代以前の（とはいえこうした仕掛けが現在では消滅してしまったわけでは

毛頭ないが）主たる仕掛けは、この宗教のモデルに従い、本来はかないものである個人の存在を超えて、この世で生きた個人の生の諸結果が存続していくことを保証し、それによって不安を緩和しようとするものである。そして宗教以外に、こうした仕掛けには大きく分けて、(a)「個人的、不死性を提供するもの」と(b)「非個人的、実在の存続と耐久性への個人的な貢献を約束するもの」の二種類がある、とバウマンは言う (Bauman 2006: 34=2012: 56)。

まず(a)であるが、これは、死後をも残る「名声」を獲得し後世の人々の記憶にとどまり続けることで不安を緩和させるものである。とはいえ、「名声」を獲得するためには、それを付与してくれる「集合的カテゴリー」のメンバーとなる必要がある。つまり、一般人ではなく、たとえば、政治家や革命家、発見者や発明者、科学者や芸術家など集合的カテゴリー（場合によっては「犯罪者」ということもありうる）の著名な一員となり、後世に名を残すということである。ただ、こうした名声を獲得できるのは一部の人間に限られる。次に(b)であるが、これは、個人的な不死性（たとえば名声）をうるチャンスに恵まれなかった普通の人びとが、たとえば国家のために戦争で自らの命を捧げるというケースのように、「非個人的な実在」の存続のための貢献者となることで、不安を緩和させようとするものである。国家や企業、家など「非個人的な実在」は様々なものが考えられるが、そのために命や一生を賭した人びとの魂は、それらの集合的な実在が存在し続ける限り、そのなかで、ある意味で、共に生き続けると考えることができるだろう。

さて、以上のような不安を解消するいくつかの仕掛けが、伝統社会から近代社会への社会的変容のなかで現れてきた。そして、こうした仕掛けは現在でも失われたわけではない。ただし、現代社会、バウマンの言う「リキッド・モダン」の社会では、これらの仕掛けは不安定なものとなり、代わって、リキッド・モダンに特有の、異なる戦略が必要とされるようになる。この点を次節以降でみていきたい。

2 不安の個人化／他者への不安

バウマンは、リキッド・モダンの社会について、次のように述べている。『リキッド・モダン』とは、そのメンバーの行為の仕方が習慣やルーティーンへと凝固するよりも速く、その行為の条件のほうが変化してしまうような社会のことである』(Bauman 2005b: 1=2008: 7)。前節でみたような、いわば「不安緩和戦略」では、名声やそれを支える集合的カテゴリー、あるいは、国家や企業といった集団が、比較的持続的なものとして存在しており、そこに属する人びとの行動様式や生活慣行、考え方も比較的固定されたものとして存在していることが前提となっていた。であるからこそ、人びとは、自分の人生よりも長く存続していくであろうそうしたもののの中で、死しても生き続けていくことを想い、不安をいくらかなりとも和らげることができた。しかしながら、一九九〇年代以降のグローバルゼーションや情報ネットワーク化の急速な進行、また、消費社会的傾向のいつその高度化にもなつて、それら集団や行動様式の持続性・安定性は徐々に失われ（もちろんまったく失われたわけではないにしても）、代わって、社会の流動性が急速に上昇した。先の引用文に立ち戻つていえば、まさに、ある特定の社会状況を念頭においた行動様式や考え方がある程度固定され共有され、持続的なものとなる以前に、その前提となっている「社会状況」自体がすでに先んじて変化してしまうような社会が、リキッド・モダンの社会である。こうした社会にあつて、不安の社会的様相もまた変化する。ここではまず、バウマンの社会理論の中心概念のひとつである「個人化」との関連で、この点について考えておきたい。

バウマンによれば『個人化』の本質は、人間の『アイデンティティ』が『所与』のものから『課題』へと変わるというところにある』(Bauman 2001b: 14=2008: 197)。ただ、こうした意味での個人化は、近代化の過程に常に付随するものであり、特に現代に特有のものではない。ただ、初期近代においては、伝統的な共同体から「脱埋め込み」された個々人は、階級やジェンダーなどの集合的カテゴリーへと「再埋め込み」されることを志

向したし、そのための場所に不足はなかった。⁽³⁾ バウマンの言う「リキッドな近代」の個人化が、こうした初期近代の個人化と異なるのは、「現代においては、社会の中の個人の位置づけだけでなく、個人がそこへと接近したりそこに移ったりすることを望んだりするかもしれない位置そのものが急速に溶解し、『人生のプロジェクト』の標的としての役割をほとんど果たせなくなっている」という点である (Bauman 2001b: 146=2008: 199)。

つまり、初期近代においては、たとえば「身分」から「階級」へと言うように、個人の「位置づけ」が変化したが、リキッドな近代においては「課題」あるいは「位置そのもの」が流動化してしまう (バウマンはこの変化を、比喩的に、初期近代では人びとを収容するのに十分な「ベッド」があつたが、リキッドな近代ではそれらは「椅子取りゲームの椅子」のようなものになってしまったと述べている)。ここでバウマンが具体的に念頭に置いているのは、主として、グローバル化した市場経済における雇用の不安定化や新しい貧困層の増大である。バウマンによれば、現代では「道の終わりに『最終的な再埋め込み』がなされるという見込みはない。常に途上にあることが、(いまや慢性的に) 脱埋め込み化された諸個人の、永続的な生き方となっている」 (Bauman 2001b: 146=2008: 200)。

リキッドな近代では、「事実」としてそれに見合う資源を各自がもっているかどうかにかかわらず、人びとには、自律的な個人たる「権利」があたえられている。そのため個人の失敗 (たとえば正規雇用労働者になれないこと、解雇、失業、貧困など) も、それらが構造的に生みだされているとしても、個人の責任とみなされる。また、近代社会全体としての目標もまた「脱規制化=規制緩和 (deregulation)」され「私化=民営化 (privatization)」され、つまりは個人化されているため、個々人がそれぞれの苦境を、他者と連帯しながら、集合的な行動によって解決しようとする道筋も、個人の立ち位置からでは見とおすことが困難になっている。このような文脈において、バウマンがたびたび引用するのが、ドイツの社会理論家、ウルリッヒ・ベックの著書、『危険 (リスク) 社会』における次の言葉である。「人生を営むことは、このような条件下では、システムの矛盾を個々の人生にお

いて解決していく営みとなる」(Beck 1986: 219=1998: 269)。

このような自己決定・自己責任を原則とする社会は、ある意味で、自由な社会ではある。ただ、そこで生きる人びとが、構造的に生みだされる苦境に巻き込まれ、不安を感じたとしても、その不安もまた、個人化されたかたちで対処されるしかない。バウマンによれば、リキッド・モダンの社会において「多くの者につきまとう不安は、それぞれ個別のケースできわめて類似したかたちで現れてくるかもしれないが、そうした不安に対しては、われわれ一人ひとりが、それぞれ自分たち自身の、多くの場合はなだしく不十分な資源を使って個人的に対処することが当然のことと考えられている」(Bauman 2006: 201=2012: 34)。現代では個人化されたかたちで不安に対処することが自明視されているが、とはいえ、対処するための十分な資源を誰もがもっているわけではない。また、かつての不安緩和戦略も、まさに個人化の帰結として不安定化している。不安感が社会の中に漠然としたかたちで浮遊し、遍在する状況が生みだされるひとつの社会的背景がここにある。

さらに、個人化の過程は、人びとの関係性、紐帯の弱体化という傾向と裏腹の関係にある。関係性や紐帯が弱体化することは、他者の不透明性、要するに他者が何者であり、何を考えているかわからないという感覚、他者は自分とは異質なものであるという感覚を増大させる。個人化は他者への不安を増大させ、また他者への不安が増大することがますます個人化、つまりは関係性や紐帯の弱体化を促すという、悪循環とも呼びうる過程がここにはある。都市において増大する他者への不安という文脈において、バウマンは次のように述べている。「隣人を愛するか嫌うかという問題はもはや存在しない。隣人を寄せつけないことで問題は解決され、二者択一は不要になる。愛するか嫌うかの選択が必要になるような場面は回避されるのである」(Bauman 1998: 48=2010: 67)。このようにして、他者への不安の増大は、他者との関係を遮断する傾向を助長し、結果として、不安が個人化される傾向をいっそう増大させる。こうした状況のなかで、共有された不安に立ち向かうために連帯することは、き

わめて困難になっている。⁽⁴⁾

II リキッド・モダンの不安の社会的様相

1 リスク化される不安

先に見た「不安緩和戦略」では、個人的名声や国家・企業などの集団を介して、死後にも存続する永遠なるもの（と思われるもの）に一体化することが意図されていた。それに対して、こうした永遠なるもの自体が流動化し不安定になるにつれて、また、個人化により不安が個人的に対処されるものになるにつれて、異なる戦略が現れてくる。バウマンはこれを、「死の周縁化（marginalization）」と呼んでいる。

バウマンによれば、「死を免れない生を永遠性と結びつける架け橋の存在を約束する代わりに、この代替的な戦略は、永続性の価値をあらさまに軽視し、減価し、否定して、不死性をめぐるあらゆる心配を根元から断ち切ってしまう。この戦略は、以前は『その後』に割りふられていた重要性を、現在の瞬間に移しかえる。それはつまり、重要性を、永続的なものから過渡的なものへと移しかえるということである。それによって、この戦略は、死の恐怖をその原初的な原因から切り離し、それを他の仕方を利用して使いやすいようにする。この戦略は、死後の生への懸念よりも、より具体的な効果、また（とりわけ）より即座の効果をもたらすものである」（Bauman 2006: 39=2012: 61-2）。つまり、永遠なるもののなかで自分の居場所を確保できるかどうかというかたちで現れる死への不安を、生活の周縁へと追いやり、代わって、死への不安を「死」そのものから切り離して、現在の生活を駆動する力へと変換しようとするのがこの戦略である。バウマンによれば、この戦略には、「死の脱構築（deconstruction）」と「死の凡庸化（banalization）」というふたつの種類がある。⁽⁵⁾以下、前者の戦略によっ

て生みだされる不安の社会的様相を「リスク化される不安」として、また、後者の戦略によって生みだされる不安の社会的様相を「消費される不安」として、それぞれ考察していく。

まず、「死の脱構築」とは、死という最終的な運命 (mortality) を直視することを回避するために、将来の死という身体の究極的限界を、現時点で直面している特定の限界へと連続的に分解し続けることである。人は、死という究極的運命に抗することはできなくても、死につながるかもしれない無数の原因に対処することはできる。「人はたんに死ぬのではない。人は病氣や殺人で死ぬのである。死すべき運命を打ち負かそうとしてもできることはない。しかし、血栓や肺ガンを防ぐためにできることは数多くある」(Bauman 1992b: 5)。死を、身体の安全や健康にかかわる無数の心配事へと読み換えて、それに合理的にひたすら対処し続けることで、死をやりすごしていくというのが、この「死の脱構築」という戦略である。「死と戦うことは無意味である。しかし、死の諸原因と戦うことが人生の意味となる」(Bauman 1992b: 7)。言い換えれば、死への不安は、純粹にそのままのかたちでは手に負えないし、根本的な解消策もなく、それを真正面から受けとめることも難しい。むしろそれを、少なくとも対処することが可能で可視的な無数の不安の原因、つまりは「リスク」に読み換えて、それに際限なく対処し続けることで死への不安をやりすごそうとするのが、この戦略である。

こうした営みにおいて、死は、否定されるべきもの、という意味しかもたない。そして、死の諸原因を処理しようとする営みは、不断の営みとなる。「死は絞首刑執行人から、監守となる」。つまり、死は、人生の最後に現れてわれわれの命を絶つ者というよりは、むしろ、その姿はみえないし、われわれもみようともしないが、それでもなおかつ、人生の諸事に遍在し、われわれをみつめている目、といった存在となる。だからこそ人は、死の諸原因に対峙する戦いの手を休めることはできない。「死は一瞬の出来事であるが、健康の擁護とそれを害するものに対する戦いは一生の仕事となる」(Bauman 1992b: 20)。

そして、このように、対処可能な諸原因へと分解された死を、止むことなく、合理的に処理し続けている限りにおいて、人は、死への不安をひとまず生活の周縁へと追いやっておくことができる。「合理的な努力は、非合理性の底知れぬ深みによどむ水を排出することを試み続ける。そうした努力が底に行き着くことはけつしてないだろうが、少なくとも、その努力がストップしないあいだは、底のことについて再び考える必要はなくなるのである」(Bauman 1992a: 152)。あるいは、たとえば死そのものに対峙するのではなく、「リスクを計算することによって手いっぱいの状態にすることによって、われわれは、これらのより大きな心配事を脇へ追いやっておくようになる。そして、そのようにして、われわれが阻止する力をもっていないような大惨事(たとえば死・筆者注)が、われわれの自信を蝕んでいくことがないようにする。われわれがそれに対して何かできるような物事に重点的に取り組むことによって、それに対してとにかく何もできないような物事についてあれこれ思いめぐらすことに心を奪われている暇はなくなってしまう。このことは、われわれが正気を保つことを助けてくれる。このことは、悪夢や不眠を遠ざけてくれる。ただしこのことは、われわれをより安全にしてくれるわけでは必ずしもない」(Bauman 2006: 11=2012: 21-2)。

「リスク化された不安」に対処し続けるこうした営みに終わりはないし、休止することもできない。われわれが「リスク」として対処できるのは、そもそも現時点で予測できる脅威だけである。バウマンによれば、「われわれが心配することができるのは、われわれが予測することができる諸帰結についてのみであり、われわれが逃れようと苦勞することができるのも、同様に、予測できる諸帰結についてのみだからである。したがって、われわれが『リスク』のカテゴリの中に入れて整理するのは、このような、『あらかじめ見てとることのできる』類の望ましくない諸帰結のみである」(Bauman 2006: 10=2012: 20)。ところが、将来的なリスク候補は無数に存在

するし、文字どおり死に至るまで次から次へと姿を現す。であるからこそ先に述べたように、停止しないでたえず動き続けることこそが必要とされるのである。⁽⁶⁾

そして、こうした傾向に拍車をかけるのが、消費社会の高度化という状況である。もともと消費社会は、人びとの欲望をたえず喚起し、更新することのできない消費へと人びとを誘うものである。そうした社会にあって、人びとが抱く個人化・流動化された不安、またリスクに際限なく対処することでその不安をやりすごそうとする傾向は、消費という観点からみても、大きな原動力となる。リスクに対処していこうとする傾向は、個人の健康から社会の安全まで、様々な次元で生じうるが、それを実現させる健康関連商品・サービスや防災・防犯関連商品・サービスなどは、社会情勢の変化に応じて、際限なく消費されうるものとなる。身体に関する不安に対処する商品にふれつつ、バウマンは次のように述べている。「消費社会が消費者不足にならないためには、その不安を……常に再活性化し、定期的に煽り、駆り立て、刺激しなければならぬ。消費市場は、消費者が抱く不安によって拡大する。市場自体がその不安を駆り立て、全力を挙げて強調しているのである」(Bauman 2005b: 91-2=2008: 158-9)。

2 消費される不安

さて、以上で述べたように、死への不安を無数のリスクとして読み換え、それに際限なく対処していくという戦略は、同時にまた、リスクに対処するための商品を際限なく消費することへとつながっていく。この意味で「死の脱構築」という戦略は、結果として、消費をつうじて不安をやりすごす傾向を促していく。ただ、消費社会的傾向の高度化は、これとはまた異なるかたちの戦略を、結果として現出させる。それが先にふれたもうひとつの戦略「死の凡庸化」である。バウマンによれば、この戦略は、「実際のところ『絶対的な』、『最終的な』、

『修復不可能な』、『不可逆な』終わりである恐るべき死を、日々『隠喩的にリハールすること』から成るものである——それによって、そうした『終わり』は、『レトロな』流行やファッションの場合がそうであるように、それほど絶対的なものではないものと見なされうるようになる。つまり、取り消し可能で可逆的な、他の多くの凡庸な出来事の中のもうひとつの出来事にすぎないものと見なされうるようになるのである」(Bauman 2006: 49=2012: 75-6)。

情報・消費社会たるリキッド・モダニティにおいて、CMや広告など情報は、次々と新しいものへと取って代わられていく。「ニュースの主たる役割は、昨日のニュースを追い払い、明日のニュースに追い出されることにある」(Bauman 1992b: 29)。また、それに応じて、われわれの消費や生活全般の様相も刻々と変化し、更新されていく。たとえば、婚姻関係や家族関係などわれわれの人間関係もまた、必ずしも永続的なものではなくなり、むしろネット上でつくられるその時々流動的な関係性によって(すべてとは言わないにしても)多くの部分が代替されていく。そこではいわば、無常であること、あるいは、ある種の「小さな死」が、永遠に繰り返されている。「日々繰り返し返される死が不死性へと変わる。すべてのものが不死的となるが、何も不死的ではない。実際のところ、無常であることのみが永続的となる」(Bauman 1992a: 174)。はかなさが永続的となるこうした状況においては、「死」と「不死」という二項対立もその意味を失う。

次々と失われ、なくなっていくことが不断に繰り返されるといこうした状況においては、比喩的に言えば、「可逆的な死」が日々、絶えることなくリハールされている。もちろんここで言う「死」は、実際上の肉体的な死を意味するものではなく、むしろ「隠喩的な死」である。つまり、購入した商品を新しい商品と取り替えて手放すこと、興味をもっていた情報を新しい情報が入ると同時に忘れていくこと、性愛関係の相手を次から次へとかえたり、パートナーシップや友人関係が頻繁に更新されたりすることなどが、「隠喩的な死」である。こう

して「死」は、取り返しをつかない生の終焉ではなく、「一時的な消失」へと読み換えられる。「日々の生活は、死の永遠の舞台稽古となる。まずもって稽古されるのは、人が獲得するかもしれない事物や、人が紡ぐであろう絆の、無常さとはかなさである」(Bauman 1992a: 187)。このようにして繰り返されるリハーサルの結果として、人々は、取り返しをつかない根本的な喪失と、一時的な喪失の差を感じることに無頓着となる。バウマンによれば、その効果は予防接種のようなものである。それは、ある程度解毒され薬となった毒を毎日注入することで、毒に対する免疫を高め、身体に宿る毒に対して人を無関心にさせる。繰り返される喪失によって、人々は喪失そのものに、また、生の途上に現れる無数の喪失と、人生の最後に訪れる根本的喪失(つまり、死)の差異に、さしたる注意を払わなくなる。結果として、本来、根本的な喪失であるはずの死も、他の幾多の喪失とさほど変わらない、凡庸な喪失のひとつと感じられるようになる。

以上のような死の凡庸化という戦略において、死への不安は、次から次へと廃棄され更新され消費される商品、あるいはそれと同様に次々と更新される生活形態の中で、いわば希薄化され、消散していく。瞬間瞬間がはかないものであっても、次々と現れる新しいものが満足をあたえてくれ、それが絶えることなく連続していく限りにおいて、喪失が嘆き悲しまれることはない。このようにして、リキッド・モダンの社会において、死の不安や脅威はやりすごされていくことになる。

3 不安格差

以上で、個人的名声や国家・企業といった集団を介する「不安緩和戦略」また、リキッド・モダンの「死の脱構築」、「死の凡庸化」といった戦略について述べてきた。バウマンの議論に従えば、われわれは、意識するにせよしないにせよ、こうした戦略を運用しながら、原初的な実存的不安、死への不安を処理、あるいはやりすごし

ていることになるだろう。

ただ、とはいえ、誰もがみな同じように、こうした戦略を自在に運用できるわけではない。これは先に不安の個人化について論じた時に述べたように、不安に個人的に対処することが要請されているとしても、対処するための十分な資源を誰もがもっているわけではない、ということである。たとえばバウマンは、二〇〇五年にアメリカ南東部を襲い二五〇〇名を超える死者・行方不明者を出したハリケーン・カトリーナを例にとって、次のように述べている。「カトリーナが選り好みしたわけではないだろう。カトリーナは、罪ある者も罪なき者も、富める者も貧しき者も、なんの偏りもなく同じように襲った——とはいえ、疑いなく自然のものであるこのカタストロフィは、その被災者すべてにとって、同じように『自然な』ものとは感じられていなかった。ハリケーンそれ自体は人間の産物ではなかったが、人間にとつてのその諸帰結は明らかにそうであった」(Bauman 2006: 78=2012: 117-8)。カトリーナの犠牲者の多くは、貧困層の黒人やラテンアメリカ人であった。富裕層は避難するだけの財力があり、また家屋などを失っても保険をかけてある。逆に、貧困層はろくに避難することもできず、また保険などかけておらず、すべてを失ってしまった。このようにみると、自然災害による破局について不安を抱くにしても、その対処能力には社会的格差があり、結果として、不安を抱く程度にも社会的に生みだされる格差があるものと考えられる。バウマンによれば、「自然的原因による災厄に向けられたものであれ人工的原因による災厄に向けられたものであれ、人間の持つ不安に対する近代の戦いの所産は、不安の量の減少というよりはむしろ、その社会的な再配分であるように見える」(Bauman 2006: 81=2012: 121-2)。つまり、不安の量は少なくとも減少することはなく、むしろ増大しており、さらには、その全体量が、社会的に不平等なかたちで再配分されている、ということである。

たびたび論じられるように、グローバルに展開する経済活動に世界が覆われるにつれ、国家が単独でそうした

経済活動から生まれる損害、バウマン流に言えば「巻き添えの損害（コラテラル・ダメージ）」(Bauman 2011a=2011) に対応することが難しくなっている。かつての「福祉国家」的体制（バウマン流に言えば「社会国家」的体制）では、国家が社会保障・社会福祉政策や経済政策による介入をつうじて、社会的資源を再配分し、格差を是正する努力がなされた。しかし、一九八〇年代のアメリカでのレーガノミクスやイギリスでのサッチャリズムといった新自由主義的政策の浸透以降、国家は、規制緩和や民営化によって、社会への介入をさしひかえ、代わって、グローバルな経済の動きに適応するためのフレキシビリティを、さまざまな次元で称揚する傾向が強くなった。グローバルな経済の進展によって、たとえば貧富の格差の増大や、雇用の不安定化といった問題が生じても、国家が単独でそれに対処し、問題を根本的に解決することがきわめて困難になっている。

不安というここでのテーマにひきつけて言えば、たとえば不安をリスク化して対処するにしても、あるいは、消費のなかで不安を消散させるにしても、そのための資源を多くもっている人もいれば、ほとんどもない人もいる。このような対処能力の格差に応じて、その人がもつ不安の強度にも格差が生じるだろう。

しかしながら、このような不安格差があるとはいえ、すべての者が不安から逃れられているというわけではない。いわゆる「勝ち組」であっても「負け組」と同様の不安にとらわれる。先にみた「死の脱構築」、「死の凡庸化」という戦略の双方とも、そのための活動を停止することはできず、際限なく続けていくことが必要とされるものであった。言い換えれば、それらは、「停止することなく際限なく続けている」限りにおいて、不安がやりすごされるという性質のものである。したがって、たとえばたまたま「勝ち組」となったとしても、こうした活動を休止することはできない。

確かにここにはある種の悪循環がある。バウマンが言うように、「目が回るような変化のペースは、今日は好ましくもあり望まれてもいるようなあらゆるものの価値を下げ、それを初めから明日の廃棄物としてしまうが、

他方、目が眩むような変化のペースの生活経験からにじみ出す、自分自身が廃棄物になる不安は、欲望がより熱心なものとなり、変化がよりすばやく望まれるものとなるよう駆り立てる……」(Bauman 2004b: 109=2007: 189-90)。リキッド・モダンの社会において、不安を回避するためになされる営みは、それがたえず、止むことなく続けられることを必要とする。安定した集団や関係が流動化し、個人化すればするほど、人びとは、不安とひとりで向き合わざるをえなくなる。そして、人びとが恐れるのは、こうした社会の流れの中で、自分だけがうまくできないこと、他の人に置いてきぼりにされ取り残されてしまうこと、そして、もう無用な者とみなされ、最終的には、バウマンの表現を借りれば、「廃棄」されてしまうことである(澤井二〇一一)。リキッド・モダンの社会において原初的な実存的不安は、このような、取り残されること、廃棄されることへの不安という相貌をみせる。バウマンは次のように述べる。「われわれ皆が不安に感じていると思われるのは、……見捨てられること、排除されること、拒絶されること、排斥されること、縁を切られること、捨てられること、われわれが現にそうであるものを奪われること、われわれがそうなりたいと願うものを拒否されることなのである。われわれが不安に思うのは、頼るものなど何もなく、一人取り残されることである。仲間、愛情、助力から除外されること。われわれが不安に感じるのは、投棄されること——廃物置き場行き順番が回ってくることである。われわれがもっとも強く欲しているのに得られないのは、こうしたことなどすべて起こらない——われわれには起こらないという確信である。われわれが欲しているのに得られないのは、除外されることへの普遍的かつ遍在的な脅威、この脅威それ自体から除外されることである」(Bauman 2004b: 128=2007: 222)。

Ⅲ 読み換えられる不安

1 「安定性への不安」から「安全性への不安」へ

以上で、不安をやりすごすために社会的・文化的に形成される様々な戦略、また、そうした戦略が運用されたとしても、なおかつ、リキッド・モダンの社会を全体として覆う、排除されることへの漠然とした不安について述べてきた。このように不安が社会全体を覆うからこそ、不安を緩和するためのさらなる社会的な仕掛けが作動し始める。これについて、以下においてみていくことにする。

まず、過去においても、古い生活条件が揺らぎ急速に変化した時、そこで生じてくる不安感を、異物とみなされた何者かに投影し、それを外部へと排除することをつうじて解消するという社会的な仕掛けがたびたび作動していた。バウマンはホロコーストについて論じる中で、近代化とホロコーストの関連性について論じていた (Bauman 1989=2006)。つまり、近代化によって過去の確実性が溶解していくことへの不安感や恐れを、境界を跨いで移動する曖昧な存在としてのユダヤ人を排除・隔離し、境界を画定することによって解消するという仕組みこそが、ユダヤ人に対する人種差別の根底にある。ユダヤ人に対する長期にわたる差別に限らず、現在でも、たとえば、流入した移民や外国人労働者を「外集団」として排除することによって、「内集団」としての自民族・自国民の輪郭を明確にし、それによってアイデンティティらしきものを感じ、不安を解消するといった仕組みは、さまざまな社会的側面において、たびたび観察されるものである (Bauman 1990: 37-70=1993: 47-91)。

グローバル化が進行し、その負の効果が、世界レベルでの貧困層の増大や生活基盤の不安定化として現れている現代において、漠然とした不安が社会にひろがっていることは先にも述べたとおりである。バウマンによれば、「今日、われわれの大半は、最上層の人間から底辺の人間まで、漠然としたかたちではあるけれど

も、排除されるという脅威、つまり、冷遇され、尊厳を否定され、辱めを受ける、しかしそれを跳ね返そうとする挑戦が、不適切なものとされてしまう脅威に、不安を感じ脅えているのです」(Bauman 2010a: 65=2012: 117)。しかしながら、このような不安に連帯して立ち向かおうと思っても、先に述べたように不安は個人化されており、またそのことが他者への不安をいっそう増殖させている中で、連帯の方途をみいだすことは容易なことではない。そもそも、こうした不安を生みだしているのが、グローバリゼーションの負の効果であるとすれば、それに対抗するのは、一個人はもちろんのこと、一国家であっても困難である。したがってわれわれは、自分の手では如何ともしがたい大きな力に翻弄され、その渦のなかで無力感を抱くしかない。

このように、構造的に生みだされる不安感に対して、しかしながら、その不安をいわば転置させるという社会的仕掛けが現在作動している、とバウマンは述べる。「おそらく今日の不安の、以前のものと唯一の相違点は、行為を触発する不安を生みだした実存的な動揺から、不安に触発された行為が切り離されているということ(decoupling)である。つまりそれは、不安の位置を、『運命』が孵化し培養される人間の自己防衛のひびや亀裂から切り離して、本当の不安感の源泉とは大部分無関係であるがその代わりに——元気づけられることに——目に見え手の届くところにある生活領域へと転置する、ということ(displacement)である」(Bauman 2006: 133=2012: 195)。つまり、グローバリゼーションの負の効果により生みだされる不安、取り残され排除されるのではないかという不安(それはそれで死の不安が纏いうる現代的な装いのひとつのかたちではあるが)を、そもそもそれが生みだされたグローバルな経済・政治構造という見渡し難く理解もし難い領域から切り離して、もっと身近で見えやすくわかりやすい領域へと転置するということである。

こうした転置は、「現代では、安定性(security)の領域(つまり、自信と自己の落ち着き、あるいはその不在に関わる領域)から安全性(safety)の領域(つまり、自分自身の身体およびその拡張物への脅威から防護される、あるい

はそれに曝されることに関わる領域」へと転置されるというかたちをとっている」(Bauman 2006: 134=2012: 195)。つまり、構造的に生みだされるが対処することが困難な社会の不安定性への不安が、より対処しやすい個人の安全性への不安へと読み換えられているというのである。そして個人は、自らの身体(1)の安全・健康や、それを取り巻く住居、街路、近隣地域の環境の安全に目を向け、それを脅かしそうなものをリスクとしてとらえ、際限なくそれらに対処していくことで、不安を解消しようとする。

そしてこうした安全性の追求は、様々なかたちをとるとはいえ、時として、われわれの周囲にいる貧困層を不審なるものとしてとらえ、それを社会の秩序の外へ追い出そうとする傾向として現れる。貧困層は、われわれ自身ももしかしたらそのようなかたちで排除されてしまうかもしれないという不安を体现するものである。それ故、そうした貧困層、あるいは「アンダークラス」の人びとを遠ざけ見えなくさせることで、われわれ自身の不安をも遠ざけておこうとする力がはたらくことになる。バウマンによれば、「アンダークラスが今日の豊かな社会にもたらしているもつとも重要なサービスのひとつが、もはや有力な外部の敵には期待できない、恐れや不安感を吸収する役割である。アンダークラスは……個々人の不安定さが原因で生じている集合的な緊張のための安全弁となっている」(Bauman 2005a: 78=2008: 150-1)。

とはいえ、こうした排除によっていわばガス抜きがなされたとしても、それは一時的なものであるにすぎない。バウマンは、貧困層、アンダークラス、「よそ者」と名指される人びとを重ね合わせながら、次のように述べている。「よそ者はまた、未知のものや不確実で予測がつかないものに對する私たちの生来の不安の都合のよいはけ口となる。私たちの家や街頭からよそ者を追い出すと、たとえ短期間であっても、不確実性という恐ろしい亡霊がいなくなる。つまり、恐ろしい不確実性の怪物が焼かれるのだ。しかし、こうしたエクソシズム(悪魔祓い)にもかかわらず、私たちのリキッド・モダンな生活は相変わらず不可解で気まぐれで、そのために不安定で

あり、安全がもたらされてもほんの一瞬の出来事であり、もつとも厳しい措置のおかげで希望が湧いてきても、すぐに消え失せてしまう」(Bauman 2011a: 60=2011: 102)。

2 読み換えの無限循環

先に「死の脱構築」に関して論じたとおり、身体の健康・安全を脅かすリスクであれ、住居や周囲の生活環境の安全を脅かすリスクであれ、リスクへの対処は際限のないものである。さらに、そもそも、このようなリスクは根本的な不安が読み換えられたものであって、リスクへの対処は、この根本的な不安の原因には向かっていない。したがって、こうした営みに終わりはけつして訪れない。このことを、バウマンは次のように述べている。「潜在的な問題は、不安が転置された領域へとどれだけ労力が注ぎ込まれたとしても、不安の本当の源泉を無効にしたり遮断したりすることはできそうにないということ、したがって、その努力がいかに真剣かつ巧妙なものだったとしても、原初的な不安感を鎮めるには無力であることが明白とならざるをえない、ということである。このような理由から、不安と、(表面的には予防的で防護的なものである)不安に触発された行為との悪循環は動き続け、その活力をまったく失うことがない——さらに、その終点へとより近づくということもない」(Bauman 2006: 134-5=2012: 195)。

先に述べたように、そもそもの根本的な不安とは、現代では、構造的に生みだされる、取り残され排除される不安というかたちをとっているが、それ自体、原初的な死の不安が現代においてとりうるひとつの姿である。死の不安について、バウマンは、それが、「無限の供給量と完全な再生可能性を誇る『天然資源』のひとつ」であると述べている (Bauman 2006: 52=2012: 79)。「死への原初的な不安は、おそらく、あらゆる不安の原型ないしは元型である。それは、他のあらゆる不安がそこから意味を借用している本源的な不安である。危険が『脅威』と

考えられる場合、その威嚇する力は死というメタ危険から生じている」。ただここである、危険あるいはリスクは、それに対処することができものであるが、それを生みだしている「メタ危険」たる死を避ける手段はないしたがって、死への不安はけっして解消されることはなく、むしろあらゆる不安を生みだす無尽蔵の「天然資源」としてわれわれの生活に、仮にはつきりと意識されることはなくとも、常に伴走するものとして現れてくるのである。

さらに、われわれがさまざまなかたちで不安を解消しようとし、たとえばそれをリスクとしてとらえて、健康やセキュリティに気を使い、さらにはそのための商品やサービスを次々と消費しているという事態そのものが、そうした事態を身近に見聞きし感じる人びとの危機感をさらに煽り、不安をさらに高めていくという循環構造がある。先に述べたような、他者との相互信頼関係が希薄化し、不安が個人化されているという状況は、こうした循環構造にさらに拍車をかけることになる。こうなるとひとたび放たれた不安は、いわば際限なく自己増殖していく力を手に入れることになる。バウマンは次のように述べている。「不安は、自己防衛的行動をとるようわれわれを促し、そのように自己防衛的行動をとることが、不安がそこから生じていると考えられる本物の、あるいは想定上の脅威に信憑性、実在感、緊迫感をあたえる。まさしく不安感に対するわれわれの反応こそが、薄暗い予兆を日々の現実として Casting し、幽霊に生身の身体をあたえるのである。不安は、われわれの動機や目的のなかに根付き、われわれの行為の中に定着し、われわれの日々のルーティーンを満たす。不安が外からのさらなる刺激をほとんど必要としないとすれば、それは、不安が来る日も来る日も促している諸行為が、不安が生き続ける枝をひろげ、開花するのに必要とされるあらゆる動機付け、あらゆる正当化、あらゆるエネルギーを供給しているからである」(Bauman 2006: 132-3=2012: 193-4)。

おわりに

さて、以上でバウマンの「不安の社会学」を再構成することを試みてきた。バウマンの議論の特徴は、冒頭でも述べたように、個人的なものとして現れてくる死への不安、実存的不安と、社会に漠然とひろがる不安、構造的に生みだされる不安をリンクさせて考える視点を提供しているところであろう。

「死について考えることで、私たちはより良く生きることができるとたびたび語られる。しかし、このような意味で死について考えることは、あくまでも個人の人生の問題として、それをとどめることでもある。また、そもそも「死」がわれわれにとって絶対的に不可知の出来事である以上、「死について考える」ことは、それほど容易なことではないはずである。

むしろ、この徹底して不可知かつ、それを前にする時われわれは無力となる「死」という現象が生成させる不安感が、いかなるかたちで読み換えられ、さまざまな社会現象の動力源となっているのか、という道筋を見定めることが重要であると思う。バウマン自身が述べているように、彼の議論もこの道筋を十全に明らかにしたものとはもちろん言えない。しかしそこに、この道筋を探るための数多くの手がかりが存在しているのもまた確かである。バウマンは次のように述べている。「デモクラシーや個人が、いかなるかたちの安定性を手に入れることになるかということは、人間存在にもとから備わっている不確定性やその存在条件の不確定性と戦おうとするのではなく、むしろ、そうした不確定性や不確定性をはっきりと認識し、それらが生み出す諸帰結に真正面から向きあうことにかかっている」(Bauman 2006: 213)。死という現象に引きつけて言えば、死そのものに立ち向かうと思っても、死が避けることのできないものである以上、そうした営みは敗北に終わる。しかしながら、むしろ、死という、誰もが必ず直面する事態が社会においてどのように受けとめられ、さらには、どのような諸帰結を

もたらしているか、というところに焦点をあてるのが、社会学、社会理論の特徴である。

「死」という現象を、この社会・世界に生きるわれわれすべての人間が共通の運命として共有しているという真実、この事実がもたらしている負の可能性を具体的に考察すると同時に、その事実がもたらしている新たな、願わくはポジティブな将来への展望を、宗教に依拠することなく、なおかつ、より具体的に、社会的な次元において考察すること、このことが必要とされているのではないだろうか。それはまた、社会的現象として不安をとらえ、その社会的意味を探るということでもある。こうした考察のためにバウマンの議論が示唆するところもまた大きいと言えよう。

(1) ここでいう「不安」の原語は、*fear* であるが、*fear* という語は、「恐怖」と訳されることも多い。ただ、恐怖という日本語に対応する英語としては、*horror* という語もあり、また *terror* という語もある。バウマンのテキストにおいて *fear* という語が使われる場合、むしろ日本語の「不安」に近いニュアンスでもちいられていることが多い。とはいえ「不安」という日本語に対応する英語としては *anxiety* がある。以上のことも考慮しつつ、本稿では、原書での *fear* を原則として「不安」、文脈によっては「恐れ」として言及し、*anxiety* を原則として「不安感」、文脈によっては「不安」として言及している。また *horror* は原則として「恐怖」、*terror* は原則として「脅威」あるいは「恐怖」として言及している。

(2) こうした事実が喚起する実存的不安は、もし強度のそれを直接的に受けとめなければならない状態に陥った場合、たとえば、心的な力のすべてをそれに抗するために差し向けなければならず、結果として他の社会的活動の一切を行う力を削がれてしまうような鬱的な状態や、たえず虚無の感覚に脅かされるようなパニック障害や不安障害のような状態をもたらすものであろう。そしてそれは、自らの生そのものを終焉させることにまで通じうるものである。逆に言えば、いわゆる普通の状態では、私たちは、このような不安を感じないですんでいるし、感じないですんでいるからこそ普通の状態でいられる、ということである。

(3) 「脱埋め込み (disembedding)」と「再埋め込み (reembedding)」という二つの概念は、もともとアンソニー・ギデンズ の概念であり、脱埋め込みは「社会関係がローカルな相互作用の文脈から『引き離されて』、時空間の無限のひろがりのなかに再構築されること」(Giddens 1990: 21=1993: 35-6)であり、再埋め込みは「脱埋め込み化された社会関係を、(部分的に、あるいは一時的にはあれ) 時間的・空間的に限定されたローカルな状況へと再びつなぎとめるために、改変し、再専有すること」(Giddens 1990: 79-80=1993: 102)である。バウマンは、これらの概念を必ずしも厳密にギデンズの定義どおりの意味ではもちいていない。大まかに言えば、伝統社会から近代社会への変化におけるように、あるひとつの社会体制から人びとが引きはがされることを「脱埋め込み」、そして、それから脱埋め込みされた人びとが新しい社会体制へと再編成されることを「再埋め込み」と、バウマンは呼んでいると考えておけばよいだろう。

(4) とはいえバウマンは、人びとが不安を解消するために、たとえばメディア上の共通の話題や問題をネタとしてかたちづくる「かけ釘共同体 (peg communities)」についてたびたび論じている (たとえば Bauman 2001b: 50, 106 = 2008: 71-2, 148-9)。ただ、この「かけ釘共同体」は、あくまでも、一時的な盛り上がり産物にすぎず、脆弱で短命、利根的な共同であって、持続性のある伝統的共同体とは大きく異なる。それはむしろ、個人的な不安を個人化されたかたちで処理することのできる集合的な、しかし一過性の仕組み、とでも言うべきものである。

(5) バウマンは、一九九二年の著作『致死性、不死性、その他の生存戦略』(Bauman 1992a)では、こうで言う「死の脱構築」、「死の凡庸化」をそれぞれ「致死 (mortality) の脱構築」、「不死 (immortality) の脱構築」と呼び、前者をモダンニティに特徴的な戦略、後者をポストモダンニティに特徴的な戦略として整理していた。しかし、近年の著作では、むしろ両者の相互関係を論じる中で、双方ともリキッド・モダンの社会を特徴づける戦略として位置づけるようになっていく (Bauman 2006=2012)。ここでも近年の概念をもちいるが、内容的には重なる部分も多いため、九二年の著作にも随時言及する。

(6) こうした「死の脱構築」のあり方と、マックス・ウェーバーが分析したプロテスタンティズムの「世俗内禁欲」の類縁性については、(澤井二〇〇五)を参照。

(7) 構造的に生みだされる不安に言及するとき、バウマンはたびたび「不安定性 (insecurity)」という概念と同時に

「不確実性 (uncertainty)」という概念に言及する。そして、場合によっては、このふたつの概念をそれぞれ別の意味を有するものとして使い分けていると読める箇所もいくつかある (たとえば、Bauman 1999: 9-15=2002: 15-85)。ただ、この区別がなされている場合でも、その内容は時と場合において変化しているようであり、全般的にみて、両概念の区別はそれほど厳密にはなされていないようである。ここでもそれ故、不確実性に関する議論も合わせて考えつつ、不安定性という語を、両者を包括する概念としてもちいて論じる。

引用・参考文献

- Bakhtin, Mikhail. 1968. *Rabelais and his World*. MIT Press. (=2007、杉里直人訳『ミハイル・バフチン全著作第七巻 フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネサンスの民衆文化・他』水声社)
- Bauman, Zygmunt. 1987. *Legislators and Interpreters: On Modernity, Post-modernity and Intellectuals*. Polity Press. (=一九九五、向山恭一・萩原能久・木村光太郎・奈良和重訳『立法者と解釈者—モダニティ・ポストモダニティ・知識人』昭和堂)
- . 1989. *Modernity and the Holocaust*. Polity Press. (=二〇〇六、森田典正訳『近代とホロコースト』大月書店)
- . 1990. *Thinking Sociologically*. Blackwell. (=一九九三、奥井智之訳『社会学の考え方—日常生活の成り立ちを探る』HBJ出版局)
- . 1992a. *Mortality, Immortality and Other Life Strategies*. Polity Press.
- . 1992b. "Survival as a Social Construct," *Theory, Culture & Society*, 9, pp. 1-36.
- . 1995. *Life in Fragments: Essays in Postmodern Morality*. Blackwell.
- . 1998. *Globalization: the Human Consequences*. Columbia University Press. (=二〇一〇、澤田眞治・中井愛子訳『グローバルゼーション—人間への影響』法政大学出版局)
- . 1999. *In Search of Politics*. Polity Press. (=二〇〇二、中道寿一訳『政治の発見』日本経済評論社)
- . 2000. *Liquid Modernity*. Polity Press. (=二〇〇一、森田典正訳『リキッド・モダニティ—液化化する社会』

大月書店

- ・ 2001a, *Community: Seeking Safety in an Insecure World*, Polity Press. (＝2007、奥井智之『コミュニティ—安全と自由の戦場』筑摩書房)
- ・ 2001b, *The Individualized Society*, Polity Press. (＝2008、澤井敦・菅野博史・鈴木智之訳『個人化社会』青弓社)
- ・ 2003, *Liquid Love: On the Frailty of Human Bonds*, Polity Press.
- ・ 2004a, *Identity: Conversations with Benedetto Vecchi*, Polity Press. (＝2007、伊藤茂訳『アイデンティティ』日本経済評論社)
- ・ 2004b, *Wasted Lives: Modernity and its Outcasts*, Polity Press. (＝2007、中島道男訳『廃棄された生—モダニティとその追放者』昭和堂)
- ・ 2005a, *Work, Consumerism and the New Poor*, 2nd ed., Open University Press. (＝2008、伊藤茂訳『新しい貧困—労働、消費主義、ニュープア』青土社)
- ・ 2005b, *Liquid Life*, Polity Press. (＝2008、長谷川啓介訳『リキッド・ライフ—現代における生の諸相』大月書店)
- ・ 2006, *Liquid Fear*, Polity Press. (＝2011、澤井敦訳『液状不安』青弓社)
- ・ 2007, *Liquid Times: Living in an Age of Uncertainty*, Polity Press.
- ・ 2008, *The Art of Life*, Polity Press. (＝2009、高橋良輔・開内文乃訳『幸福論—生きづらい、時代の社会学』作品社、2009年)
- ・ 2010a, *Living on Borrowed Time: Conversation with CitaliRovrosa Madrazo*, Polity Press. (＝2011、高橋良輔・高澤洋志・山田陽訳『《非常事態》を生きる』作品社)
- ・ 2010b, *44 Letters from the Liquid Modern World*, Polity Press.
- ・ 2011a, *Collateral Damage: Social Inequalities in a Global Age*, Polity Press. (＝2011、伊藤茂訳『コラテラル・ダメージ—グローバル次代の巻を添え被害』青土社)

- , 2011b, *Culture in a Liquid Modern World*, Polity Press.
- Bauman, Zygmunt and Leonidas Donskis, 2013, *Moral Blindness: The Loss of Sensitivity in Liquid Modernity*, Polity Press.
- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Shirkamp. (＝一九九八、東廉・伊藤美登里訳『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局)
- Becker, Ernst, 1973, *The Denial of Death*, Free Press. (＝一九八九、今防人訳『死の拒絶』平凡社)
- Elliott, Anthony・片桐雅隆・澤井敦、二〇一〇「新しい個人主義と日本社会—理論的手法、日本の社会学、日本社会をめぐる一考察」『現代社会学理論研究』4 : 六七—九二。
- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press. (＝一九九三、松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?』而立書房)
- Heidegger, Martin, 1927, *Sein und Zeit*. (＝一九九四、細谷貞雄訳『存在と時間』(上・下)ちくま学芸文庫)
- 菅野博史、二〇一「リキッド・モダン社会における道徳の可能性—バウマン社会学理論の抱えるディレンマについて」『三田商学研究』54(5) : 三九—五〇。
- 中島道男、二〇〇九『バウマン社会学理論の射程—ポストモダンティと倫理』青弓社。
- 澤井敦、二〇〇五『死と死別の社会学—社会学理論からの接近』青弓社。
- 、二〇一「原子化・私化・個人化—社会不安をめぐる三つの概念」『法学研究』84(2) : 二二—二七八。
- 徳田剛、二〇一〇「Z・バウマンの社会秩序観—『よそ者』と『社会的距離』の視点から」『社会学史研究』32 : 五九—七三。

※本文中の訳文は、訳書のものとは異なる場合がある。

※本稿「はじめに」の一部は、拙訳 (Bauman 2006=2012) の「訳者あとがき」の一部を転用している。